

居住地移動と移動する「ホーム」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学都市研究プラザ 公開日: 2022-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Buckle, Caitlin, 住吉, 康大 メールアドレス: 所属: ニューサウスウェールズ大学, 東京大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2003174

Title	居住地移動と移動する「ホーム」
Author	バックル, ケイトリン / 住吉, 康大[訳]
Citation	空間・社会・地理思想. 25 巻, p.123-133.
Issue Date	2022-03
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	Copyright ©2017 The Author(s) Reprinted by Permission of John Wiley & Sans Ltd.
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

居住地移動と移動する「ホーム」

ケイトリン・バックル*
(住吉 康大** 訳)

Caitlin BUCKLE

Residential Mobility and Moving Home

Copyright © 2017 The Author(s)

Reprinted by Permission of John Wiley & Sons Ltd.

Abstract

本稿では、新しいモビリティーズパラダイム下での「モビリティ」、「場所」、そして「ホーム」の概念化に見られる変化と、その再概念化が居住地移動研究に与える影響を説明する。モビリティ研究者の間で、「新しいモビリティーズパラダイム」は場所とモビリティとの関係の(再)概念化を説明する(Cresswell, 2006; Sheller & Urry, 2006)。場所をモビリティと結びつけたものとして再概念化することで、場所から場所へと移動しうのような、生きられた経験としてのホームという、より動的で包括的な見方が導かれる(Gillespie, 2017)。このレビューでは、そのパラダイム内部の研究者たちによって、居住地移動——あるいは一つの国民国家内部での(再)配置——が、別の、生きられたホームの経験としてどのように議論されているのかを探る。後半では、居住地移動研究への理論的・方法的アプローチにおいてホームの生きられた経験が現在どのように統合されているのかについて論じる。特に、縦断的(longitudinal)¹⁾手法、民族誌的(ethnographical)手法、語りによる(narrative)手法、伝記的(biographical)手法の組み合わせ、そしてホームの動的で生きられた経験を探るためにライフコースの方法論的な枠組みを活用するという最近の地理学的な研究について考察する。「ホームのモビリティ」の理解を前進させることで、居住地移動の研究者は、場所の経験にモビリティが与える影響についてのより幅広い議論に貢献することができる。

1 INTRODUCTION 序論

居住地移動(residential mobility)とは、日常の活動のある場所から他の場所へ動かすこと——「普段の」居住地を動かすことである(Bell & Ward, 2000; Rossi, 1955)。この幅広い定義には国際移住も含まれるが、地理学における「居住地移動」は通常、地域間、都市内、あるいは国内移住といったより短い距離の移動を表す(Rossi, 1955)。居住地移動は、雇用、家族、あるいはアメニティへのアクセスを求める住宅ニーズへの対応と関連して検討されることが多い(Holdsworth, 2013)。例えば、Coulter and van Ham (2013)はライフコースの枠組みを通じて、居住地移動を「変化していくニーズと選好を満たすために、世帯が自分たちの住宅を近隣と位置的な消費とに適應できるようにするメカニズム」であると定義した(p. 1037)。この「住宅、近隣、そして位置的な消費」は、ホームの経験や住まうことそれ自体についてよりも、住宅とその保有権との関連で「住宅歴(housing career)」の一部として検討されることが多い(Clark & Dieleman, 1996; Clark & Huang, 2003; Mulder & Hooimeijer, 1999)。居住地移動の地理学的な定義におい

て「ホーム」が見落とされているのは、モビリティがホームでの生活やホームの実践にとって破壊的なものとみなされることが多く(Relph, 1976)、また実際にホームの意味を確立することが難しい(Blunt & Dowling, 2006)ためだと考えれば理解できる。しかし、居住地移動をホームでの生活の移動と考えることによって、居住地移動と、例えば旅行や仕事、余暇、あるいは一時的なモビリティといった、他の短期間または潜在的に短距離の移動とを、より正確に区別できるようになるだろう(Bell & Ward, 2000)。本稿は、ホーム概念がどのように居住地移動と関係するのかを検討することによって、居住地移動研究におけるホーム概念の欠落について探究することを目標とする。

「ホーム」と「場所」の概念は、移住や居住地移動の議論と複雑な関係にある(Relph, 1976)。居住地移動は、モバイルな個人とその環境にとって、正負両方のメカニズムとしてみなすことができ、移動が可能になるのか、促進されるのか、または妨げられるのか、などの点で混乱を伴う。定住主義的な視点に立てば、居住地がモバイルな人々は、定住主義的な規範と、定住的な文化が優先される世界においては変

* University of New South Wales, Australia (ニューサウスウェールズ大学)

** 東京大学大学院総合文化研究科・院士

則的かつ周縁的であり、ホームとのつながりは弱いと考えられる (Cresswell, 2006; Relph, 1976)。定住主義的なホーム概念と、モバイルな人々を「切断されている」とする概念化によって、居住地移動研究は長い間、ホームの経験に対する破壊を説明するか、ホーム概念を全く含まない方向へ向かってきた。しかし、モビリティは必ずしもホームの理解に反するものではなく、定住主義的なホーム概念に反するものである (Ahmed, Castaneda, Fortier, & Sheller, 2003; Blunt & Dowling, 2006)。ホームは必ずしも固定された位置ではなく、場所から場所へと動きうる、生きられた経験なのである。

このレビューではまず、モバイルなライフスタイルの定住主義的な概念化と、モバイルなライフスタイルを切断されていてホーム概念にとって破壊的なものだともみなし価値を損なうことについて論じる。3章では、地理学内部での居住地移動に関する細かく複雑な意味合いを持った議論と、新しいモビリティーズパラダイムの出現、そしてそれに伴って生じた、場所とホームの両方に結びつくものとする、モビリティの従来とは異なる概念化 (Ralph & Stacheli, 2011) について論じる。新しいモビリティーズパラダイムの研究者は、ホーム概念を不安定化させるものとしてではなく、異なる形でのホームの経験として、議論の焦点を居住地移動に定めなおしている (Coulter, van Ham, & Findlay, 2016)。この章を通して、「ホームのモビリティ」を理解するためには、居住地がモバイルである人々の生きられた経験と、彼ら・彼女らの人生全体に及ぶホームのダイナミズムに対する様々な影響について熟慮することがいかに必要であるかを探究する (Coulter et al., 2016)。本レビューの最後の章では、様々な研究手法を通してどのようにホームと居住地移動が探究されているかについて詳述する。伝記的、民族誌的、語りによる、そして縦断的な手法を組み合わせることと、方法論的なライフコースの枠組みが、時間と共に（複数の）ホームが動くことの影響について理解する際にどれほど助けとなるか、大まかに述べる。ホームと場所のダイナミズムと生きられた経験を捉えるために、将来の研究がいかにライフコースの枠組みをよりよく活用しうるかについて提案することで、本レビューの結論とする。

2 MOBILE AND SEDENTARY LIFESTYLES モバイルなライフスタイルと定住的なライフスタイル

モバイルな、そしてノマド的なライフスタイルは、西洋社会の定住的な規範の中で依然として権利を奪われた状態にある (Cresswell, 1999; Kabachnik, 2012)。国際的には、ノマド的な文化は、財産法と、大地を区切りモビリティの経路を制限する物理的な障壁——フェンスから国境に至るまで——とによって不利な影響を受けている (Kabachnik, 2012; Kabachnik & Ryder, 2013)。例えば、ロマ²⁾あるいはジプシーが固定された住所を持っていないことは、逸脱と犯罪性の兆候として受け止められる。ロマが定住的な規範に順応したくない、あるいはできないことによって、ヨーロッパや南北アメリカ大陸内部のホスト国において人種差別が生じている (Holloway, 2003, 2005; Kabachnik, 2010)。ノマド的な先住民の文化を（定住的な）植民地主義的イデオロギーによって支配することは、多くの入植者社会におけるモバイルなライフスタイルの歴史的な「他者化」を証明している。例えば、オーストラリア先住民のホームと場所に住まう経験はイギリス人の入植者には理解されなかった (Behrendt, 1999; Taylor & Bell, 1996)。散在する人口、モビリティの実践、そして先住民による居住の一時性が、オーストラリア大陸における terra nullius (誰のものでもない土地) という植民地政策を引き起こした (Banner, 2005; Prout, 2009)。西洋の住宅所有権のヒエラルキーの中で、オーストラリア先住民の「ホームランド」の経験は住宅と不動産としてのホームという概念によって上塗りされてしまった。規範的で西洋的な定住生活の解釈に抵抗し、場所のネットワークの内部でモビリティを実践するオーストラリア先住民は、依然として問題となっており、誤解されている (Taylor & Bell, 1996)。

居住地移動に関して、大部分は定住的な人口であって、多くの人にとって「家にいる」という感情を引き起こすのは、単一の、固定された位置である。国際的に、大多数の人々は居住地を動かさないので、住宅と財産の所有権、雇用、学校、その他サービスに基づくインフラは主に定住的なライフスタイルを念頭に置いたものである (de Jong, 2000; Prout, 2008; Wolf & Longino, 2005)。単一の位置または住宅によって表象されるものとしてのホームで見出される快適さは、単一の場所に住まう人々に適した幅広い構造的なシステムによって支えられている。移動することをあえて選ぶ人々の要因と性質、そして彼ら・

彼女らのホームライフに与える影響——前向きなものであれ後向きなものであれ——については、数多くの論点が残されている。

居住地移動とノマド的な実践との関係でホームの概念が議論されるとき、それはしばしば「無秩序」あるいは「不安定」な経験として説明される (Brednikova & Tkach, 2010). Relph (1976) は、彼の著書 *Place and Placelessness* の中で、「最も移動的で渡り鳥的な人々が必ず家なしや場所なしであるということではな」いと認めている (p. 30; 訳文 p. 83). しかし、続けて彼は西洋社会において増加する居住地移動について『『住まい』』の意義の低下によって可能になり、同時にそれが意義低下を助長する」と説明している (1976, p. 83; 訳文 p. 196). 住宅を移ることは、パートナーとの離別 (de Jong & Graefe, 2008), 家族の崩壊 (Feijten, 2005), 住宅市場の悪化と不安定性 (Ferreira, Gyourko, & Tracy, 2010; Kull, Coley, & Lynch, 2016), 個人的な不満 (Nowok, van Ham, Findlay, & Gayle, 2013), そして若年者の非行と薬物の使用 (Porter & Vogel, 2014; Stabler, Gurka, & Lander, 2015) といった負の社会的問題と関連づけられてきた。健康, 住宅, 犯罪学, そして社会学といったさまざまな学問分野内部でのこれらの語りは、居住地移動がホームに結びつく安定性と安全とは対照的であるということを示唆している (Winstanley, Thorns, & Perkins, 2002).

このような暗い語りもあるが、居住地移動は個人の生きられた経験に対して前向きなインパクトをもたらすこともある。居住地移動は住宅の状況や近隣の環境を改善する方法になり得る (Clark & Onaka, 1983; Clark, 2009; Clark, van Ham, & Coulter, 2014). Relph の *Place and Placelessness* より10年前に出版された, Peter Rossi の *Why Families Move* (1955) は、居住地移動を家族の事情が変化するのに伴う自然な熟慮の結果として論じた。若年の成人が自立を求めるステップとして、さらには住宅所有に向けたステップとして家を出ていく (Holdsworth, 2013; Ronald, 2008), 子どもをもうけることを見越してより家族に適した地域を求めて都市を出ていく (Kulu, 2008; Michielin & Mulder, 2008), あるいは退職してより高度な環境アメニティのある位置へ移動する (Stockdale, 2006, 2014) などのように、居住地移動は、特定のライフステージと強く結びついてきた。居住地移動は、実際期間や家族形成といった、他の手段では実現できないような様々な社会的ネットワークを形作る重要な資源にもなり得る (Holdsworth, 2013).

一つの場所における永続的な快適さは規範という

よりも特権であり、転居することは「出生地という制限から自由になる」 (Cairns, 2008, p. 243) 方法をもたらしうる。単一の位置は、家庭内での服従、恐怖、あるいは虐待の場になることもあるため、そのような場合にはその位置から移動することが「ホームにいる」という安全性を得る手段になる (Blunt & Dowling, 2006; Jones, 2000; Massey, 1994). 新自由主義的な政策によって、個人が自らの社会的地位向上をコントロールする手段として、ますます居住地移動が促進されている (Imbroscio, 2012; Sharkey, 2012; Clark et al., 2014). これらの「モビリティを促進する (pro-mobility)」政策によって、本当にモビリティは促進され、可能にされているのか、それとも妨げられているのか、という問いと懸念が生じている (Imbroscio, 2012). ホームを移ることで、個人は移動前の位置に関連する問題から自由になるかもしれないが、この移動が結果として、機会を得ようと移動する個人に負荷が課されるような社会空間的不利益をますます集中させる結果になる可能性がある。このことは、「向上のために動く」ことのできる人々と、様々な理由によってそれができない人々との間の不均衡を生み出す (Clark et al., 2014; Imbroscio, 2012).

このような緊張関係は、地理学者に対して、居住地移動を取り巻く問題と利益を理解する助けとなるように、動くこと (moving) と留まること (staying) から明らかになる権力構造に注意を向けるよう喚起した (Coulter & van Ham, 2013; Coulter et al., 2016). これらの権力構造に注目することは、居住地移動が個人とその環境に対してどのようにインパクトを与えるかを明らかにするのに役立つ。移住と居住地移動を研究する際の最も大きな課題の一つは、自発的な移動とそうではない移動とを区別することである。というのも、これら2つの概念を定義したり区別したりするのがそう簡単ではないからである (Imbroscio, 2012). 動くように強制されることは極度に破壊的であり苦しいが、しかし動きたいという願望を実現できないこともまた、生活の質に影響しうる (Coulter & van Ham, 2013). 個人の移動についての生きられた経験を理解することは、居住地移動を取り巻く規範的な問いと、モビリティがいかに彼ら・彼女らのホームライフをかき乱しているか、あるいはホームライフを築くのに役立っているかを探究する手段である。以下では、場所とホームとが新しいモビリティーズパラダイムの社会学者と地理学者とによってどのように再概念化されたのか、そしてそのパラダイムが移動するホームの生きられた経験についての研究に与えた影響について論じる。

3 NEW MOBILITIES PARADIGM 新しいモビリティーズパラダイム

1990年代、研究者たちは、場所において意味を経験することとモビリティは正反対であるとみなすような、場所の定住主義的な捉え方に異議を申し立て始めた (Hannam, Sheller, & Urry, 2006; Massey, 1994; Sheller & Urry, 2006). 新しいモビリティーズパラダイムが出現する中で、Urry (2000) は場所の内部と場所間とで実践されるモビリティの発生が増加していることに注目して、固定化され境界を定められた場所という考え方を捨て去った。彼にとって、場所は劇における背景幕のような、単純な設定ではなく、時間と空間を越えたネットワークとつながりによって作り上げられたものであった。この新しいモビリティーズパラダイムでは、場所はライフイベントにとっての動かない設定ではなく、「プロセス」(Massey, 1994; Pred, 1984) または「経験」(Cresswell, 2009) といった、モビリティの強固なネットワークが常に絡み合うようなものとして論じられてきた (Cresswell, 2002; Cresswell, 2009; Massey, 1994). 場所を「経験」とみなすことで、場所の概念化に動的な性質が付加され、その中では、人々が移動する際に周囲と相互作用して意味を見出すことにより、揺るぎなく場所と結びつく (Adey, 2006). 場所とモビリティとを結びつけることによって、モビリティを周縁的、破壊的、あるいは相互作用的な実践とする議論から、モビリティを「日常生活のミクロ地理学」の一部として強調する議論へと変化した (Cresswell, 2011, p. 551).

経験としての場所という考え方によって、居住地移動を取り巻く議論は変化している (Gillespie, 2017). 居住地を動かせる人々は、経済的な日和見主義者——場所にほとんど関心を払うことなく、住宅市場と労働市場の満ち引きのなすがままに動く人々——として論じられてきた長い歴史がある (Dieleman, 2001; Ravenstein, 1885; Ravenstein, 1889; Wolpert, 1966; Zelinsky, 1971). しかし、新しいモビリティーズパラダイムでの議論においては、場所と完全に切り離されたものとみなされるよりもむしろ、場所を経験するプロセスの一部として、居住地移動が考察されうる (Coulter et al., 2016). Clare Holdsworth (2013) は家族のモビリティについての著書において、親の監視下でない場所で異なるアイデンティティを構築し、新しい社会ネットワークを形成し、人間関係を形作るために、個人が移動するという、「空間的自立 (spatial independence)」(p. 45) と

いう考え方を導入した。Holdsworthは、知覚される空間的自立へのニーズがどれほど文化的な期待と社会的・地理的要因に影響されているか、そして、空間的自立を得るために国家を越えた移動を必要とする個人もいる中で、隣の家に移動することで空間的自立を得られる個人はどのようにそれを可能としているのかを強調している。場所から場所へと移動する人々は、場所を形成し、場所を差異化するのに役立つ複雑な移動を行っていながらも、必ずしも場所を完全に無視しているわけではない。常に前向きな経験であるとは限らないが、居住地移動は、自分の「世界の中での居場所」を探し求める手段として、どこならばより理想的な周囲環境にアクセスできるのかという意思決定と検討が行われた結果なのである (Kloap, Hendry, Glendinning, Jan-Erik, & Geir, 2003, p. 104).

場所の再概念化と、場所とモビリティとの関係の再概念化に伴って、「ホームと呼ばれる場所」の再概念化も生じた (Blunt, 2005; Easthope, 2004; Hannam et al., 2006). ホームは、一定の安定性と固定性がある安全な場所として、そして外界の混沌とした数々の動きから離れた、静かな場所として説明されることが多い (Heidegger, 1996). 定住主義的で男性中心主義的な視点では、単一の安定した住宅がホームを具現化し、物理的な恒常性を通じて快適さと親しみやすさをもたらす (Blunt & Dowling, 2006; Cresswell, 2006). Young (2005) は、ホームの創造は固定的な住宅の建築だけに関係するものではないにもかかわらず、ホームを物質的な住まいであるとするような概念化の、ジェンダー的な特徴について述べた。ホームは、その内部や周囲で行われる日常的な習慣や活動によっても創り出される (de Certeau, Giard, & Mayol, 1998). ホームは心落ち着く経験だが、必ずしも物理的な静止を必要とするわけではない。

地理学者のAlison BluntとRobyn Dowling (2006) も、ホームは安全・個人化・プライバシー、そして保護のための場所であると考えような、「ホームとしての住宅」の代わりとなる、より物質的ではない概念を提示している (p. 5). この抽象的で包括的なホーム概念には、物理的な構造や環境の設定は必要なく、重要なこととして、場所を変えるごとにホームを作り直し、経験することができる。トランスナショナリズム (Blunt & Dowling, 2006), 住宅所有の減少と不安定な民間賃貸への依存 (Burke, Stone, & Ralston, 2014; Lund 2013), バーチャル技術を通じた家族、雇用、社会ネットワークの維持 (Knies, 2013) といった、居住地移動とホームの経験にインパクト

を与える現在の動向を論じる際には、このように変化したホームの定義を検討することがますます重要になるだろう。ホームは今や、地理学の中で「モバイルであると同時に定住的で、特定の地域に限定されると同時に拡張することもできる」と論じられている (Ralph & Staeheli, 2011, p. 525)。

ここまで説明してきたホームのモビリティは、居住地移動を通じてホームの経験が失われるという考え方に疑義を呈するものである。居住地を動かすことは、日々の制約からの自由、そして異なる位置でホームを再び確立し、向上させる機会を意味している。例えば、多くのクィアの人々は、子どもの頃に過ごしたただ一つのホームは抑圧されたアイデンティティのある場所だとみなしていて、「ホームに帰る」というのはクィア・フレンドリーな——たいてい都市部の——環境へと移動する行動である (Fortier, 2001; Gorman-Murray, 2007)。Andrew Gorman-Murray (2007) は、クィアの人々にとってのアイデンティティ形成が子どもの頃に過ごした地域から移動することとしてどのように表明されるかを明らかにし、「…物理的な身体の移動とアイデンティティの変化が、転居という一つの行動によって同時に成し遂げられ、達成される」と述べている (p. 109)。Altman and Low (1992) は、著書 *Place attachment* の中で、国際移民にみられる多様な位置でホームを(再)創造する能力を「自己のモビリティ」と称した。モビリティはホームからの切断であるという仮定は、モバイルな人によって実際に生きられた経験を一般化し、単純化している。場所とホームの経験が居住地移動にどのように影響し関係しているのかを検討すべきであるし、これらの生きられた経験をモバイルな個人に限定されるものと仮定すべきではない。

次章では、居住地移動に関する研究の中で場所とホームの生きられた経験がどのように調査されてきたのかについて議論する。地理学における居住地移動研究では、研究手法にライフコースの枠組みを取り入れることが増えており、居住地移動に対してアイデンティティと環境が与える影響の研究において、ライフコースの枠組みがいかに役立つかについても論じる (Coulter et al., 2016; Findlay, McCollum, Coulter, & Gayle, 2015)。最後に、ライフコースの枠組みに混合研究法を取り入れることを提案する。混合研究法を導入することで、モビリティに対する影響だけでなく、モビリティがホームの生きられた経験に与える影響について検討する際にも、ライフコースの枠組みを活用する機会が生まれる。

4 HOME IN RESIDENTIAL MOBILITY RESEARCH 居住地移動研究におけるホーム

居住地がモバイルである人々の、多様で動的なホームの生きられた経験を、西洋の伝統的な居住地移動研究の手法を通して理解することは困難である。居住地移動研究は、単一で安定したホームの場所を前提とするセンサスと計量調査から得られた量的データを用いている (Coulter et al., 2016; McHugh & Mings, 1996; Prout, 2008)。これらの指標は、「典型的な」移動者についての情報を集め、より大きな構造的影響や権力関係、広いスケールの傾向を明らかにするために設計されている。このような指標は、重要な記述的役割を担っており、計画者と意思決定者にとっては常に必要不可欠である。しかし、多様な個人による移動の複数性や複雑性を理解しようとする際には、量的な指標と手法の利用に明確な限界がある。固定された住所と量的な情報を用いると、過度な単純化につながることが多く、居住地がモバイルである人々がアメニティ移住⁴⁾、経済的移住、反都市的 (counter-urban) 移住⁵⁾、国際移住、国内移住などの用語で分類されてしまう (Geist & McManus, 2008; King & Skeldon, 2010; Stockdale, 2014)。これらの分類は、移住者の経験を一般化し、個人の人生における1回あるいは少数の移動を説明するだけで、移住を「片道の旅」(McHugh, 2000, p. 71) あるいは単一の事象として説明する。さらに、センサスデータに依拠することによって、非永続的または半永続的な構造の間を移動する、モバイルなホームやキャラバンを有する、同時に複数の住まいを所有する、などのような、高度にモバイルな個人についての基礎的で記述的な情報を捕捉することが困難になる (Behr & Gober, 1982)。

居住地がモバイルである個人についての基礎的な説明の先にあるのは、居住地移動による個人の経験と規範的なインパクトを理解する必要性である。新自由主義的な論理では個人が状況を改善させるための権利として居住地移動が提示されるが、定住主義者の意見では、モビリティが場所とホームの形成にとって有害なものと思なされる。多くの居住地移動研究の焦点は、社会ネットワークや経験、ホームライフよりも、住宅の快適さ、または経済的な快適さに置かれている。このような研究の焦点では、住宅の改善、あるいはより望ましい社会経済的位置への移動を通じたホームの向上が前提とされる (Clark, 2009)。実際には、居住地移動が不安定なホームを

作り出す可能性もあれば、ホームライフを向上させる手段になり得る可能性もある。そして、この緊張関係がどのように緩和されるかは、住宅や社会的な地位を超える数多くの要因に依存する(Clark, 2009)。ホームは主観的な概念であり、ホームとモビリティの関係性は個人的な状況と生きられた経験に依拠するのである。

1990年代から2000年代にかけて、居住地がモバイルである人々の生きられた経験は、より質的な手段を通して検討された。ホームの経験におけるモビリティと静止状態とのつながりは、ホームプレイスのネットワーク、ホームの複数性、そしてモバイルなホームを観察することによって研究されてきた(Gustafson, 2001; McHugh, Hogan, & Happel, 1995; McHugh & Mings, 1991; Silvey & Lawson, 1999)。地理学者は、居住地移動がホーム概念とどのように関係するのかを、民族誌的な手法と語りによる手法を用いて検討した。例えば、Kabachnik (2010) は、ローマ(Roma)がコミュニティとして移動する際に実践するホームのモビリティを、民族誌的手法を通じて調査した。彼は、異なる場所でホームを作り出すローマの能力が、新しい場所へ移っていく社会的ネットワークの濃度にどれだけ依存しているかを明らかにした。Mason (2004) は、語りによる手法を通して、個人的な居住地の意思決定における結び合わされる人生(linked lives)の影響を明らかにした——伝統的な居住地移動についての手法では特定して探究することが難しい要因である。Gutting (1996) は、ドイツへ移住したカップルにインデプスインタビューを行った。彼は、カップルの居住地に関する歴史を論じ、ナラティブ分析を通じて、カップルによる生まれ育った場所への帰還移住(return migration)に対する願望が、今いる場所に居続けたいという願望と直接的な緊張関係にあること、そしてその緊張関係は、家族の事情と、自分たち自身で作り上げてきた生活とに起因することを立証した。これらの質的研究法によって、ホームと場所の生きられた経験がモバイルな実践によってどのように影響されるかを検討している。

非常に複雑で動的なホームの変化を過度に単純化することを克服するもう一つの方法は、時系列に沿って移動を追跡することである。縦断的(de Jong, 2000; Rossi, 1955)で伝記的な手法(Clark, 2009; Coulter & van Ham, 2013; Halfacree & Boyle, 1993; Skeldon, 1995)は、居住者の生涯を通しての転居を探究する居住地移動研究に組み込まれてきた(Findlay & Wahba, 2013)。Findlay and Li (1997) は、個人

の過去の経験が将来の居住地移動にどのように影響するのかについての検討の中で、自伝的な技法がいかに有効かを示した。彼らは、幅広い人口調査では見逃されることの多い帰還移住、循環的移住、そして季節的移住について論じた(McHugh & Mings, 1996; Stockdale, 2014)。McHugh and Mings (1996) は、ホームが季節的に、かつ2つの異なる場所で交互に創り出される循環的モビリティを探究するため、アリゾナの避寒者(snowbirds)たちの伝記を記した。そしてClark (2009) は、様々な移住に関する伝記を示すことで、「恵まれない(deprived)」近隣での経験が持つ個人的、関係的、そして主観的な特徴を明らかにした。縦断的で、民族誌的で、語りによる、伝記的な手法を活用することで、個人的な経験と、複雑な住居の移動についての詳細な説明を探ることができる。

4.1 Life course frameworks ライフコースの枠組み

ライフコースの枠組みは、人々と場所との永続的な関係を人生の軌跡に重ね合わせて検討するために、研究に取り入れられている。1990年代から、居住地移動研究はライフサイクルという概念から離れて「ライフコース」という概念と緊密に結びつくようになった(Clark & Dieleman, 1996; Mulder & Hooimeijer, 1999)。居住地移動の研究者に長く立ちはだかってきた難題は、個人的な要因と、より広い構造的・社会的要因との両方が、時間の経過とともに居住地移動へと同時に及ぼす影響を両立させることである(Skeldon, 2012)。新しいモビリティーズパラダイムが求める場所とモビリティとの関係を探る手段として、ライフコースの枠組みを導入することで、この難題を克服することができる(Bailey, 2009)。ライフコースの枠組みを活用する研究は、行為主体性と個人のライフステージだけでなく、関連する生、時間、場所、さらには個人の移動を成立させる文化をも探究する(Coulter & Scott, 2015; Elder, 1994; Kulu & Milewski, 2007)。

これらのライフコースの枠組みを取り入れた研究により、アイデンティティと、居住地移動に影響する位置づけ(positioning)についての洞察が得られる(Coulter et al., 2016; Feijten, Hooimeijer, & Mulder, 2008)。例えば、Stefanie Kley (2011) は、社会人口学的な変数、心理的な特徴、社会的な紐帯、機会格差についての認識、そして予期されるライフコースイベントについての調査データを収集した。彼女は、ドイツの都市マグデブルグMagdeburgとフラ

イブルクFreiburgから生じうる転出に寄与するライフコースの要因の組み合わせを明らかにした (Kley, 2011). Falkingham, Sage, Stone, and Vlachantoni (2016) は、1950年以前にイギリスで生まれた3つのコーホートの居住地移動を比較した。彼らは縦断的な手法とライフコースの枠組みを用いて、人生での居住地移動の軌跡を検討するために、子どもや雇用、パートナーシップといったライフコースイベントと、社会的・歴史的な文脈について考察した。この研究による発見として、コーホート間で居住地移動の軌跡に生じる変化のジェンダー化された性質が明らかになった。すなわち、イギリスの男性と女性のライフコースイベントには、社会歴史的な文脈が異なるインパクトを与えていた。Coulter and van Ham (2013) は、個人的な居住地移動の記録を追うことによってモビリティとイモビリティ (immobility) の相互作用についての重要な例を挙げ、移動そのものと移動に対する願望との間には時折切断があることを明らかにした。アイデンティティと社会的、政治的、経済的文脈の権力関係がモビリティの実践にどのように影響しているかについての研究は、ライフコースの枠組みを取り入れることで達成され、時の経過に合わせてモビリティの生きられた経験を理解する機会をもたらす。

4.2 Home and the life course ホームとライフコース

アプローチは多様であるが、居住地移動研究に用いられる様々な手法は、動的で生きられたホームの経験の限られた側面しか捉えていない。驚くほどのことではないが、最近まで、地理学でもほかの学問分野でも、ホームについては居住地移動研究における優先的な焦点ではなかった。伝統的な量的調査の指標とセンサスデータを利用することが、文脈を形成し、モビリティと移住の一般的な言説を作り上げる助けにもなっている。しかし、それらがホームの個人的な経験についての対話に加わることはない。居住地移動の分野においては、縦断的でライフコースに関する研究の大部分が量的なものであるが、個々の個人的なホームの経験とホームの理解が量的な測定だけで十分に把握されるとは考えにくい。質的で伝記的な、語りによる、そして民族誌的な手法を活用する研究であれば、研究への参加者は個人的なホームの経験をはっきりと伝えられるようになるだろう。しかし、そのような研究では、人々のモビリティが成立する幅広い権力関係が見逃される可能性もある。

ライフコースに沿ってホームの経験を探究する際に、量的な手法による記述的な性質と、質的な手法の強みを組み合わせるチャンスはある。量的な分析は、移動についての緻密な記述を提供し、イモビリティとモビリティの実践における権力の不均衡を明らかにし、幅広い政策と意思決定に必要な、個人に対して作用する構造的な影響を解き明かす。質的な手法は、居住地移動とホームの経験に関する規範的な視座をもたらす。ライフコースを通して構造的、環境的、文化的な影響が個人的なホームの経験に対してどのように作用するのかは、これら2つのアプローチを統合することによってより良く探究することができる。地理学にライフコースの枠組みを取り込むことと、これらの枠組みの内部で適用できる手法が持つ汎用性によって、ホームのダイナミズムとモビリティを理解するための創造的で革新的なアプローチの機会が生じる。

5 CONCLUSION 結論

ホームは、居住地移動における中心的な概念であるが、モバイルな個人の多様で個人的なホームの経験は、居住地移動研究においてしばしば看過されている。ホームと場所の概念から切り離されたものとして移動という行為を軽視すると、人々を移動へと駆り立てるような権力関係と個人的な要因についてまず探り、対処することさえせずに、モバイルな個人をさらに周縁化してしまう。その対応として、新しいモビリティーズパラダイムの研究者たちは、場所をモビリティの概念と不可分に結びついているものとして再概念化し、日常的な移動と居住地移動をホーム概念と関連付けて検討している。モビリティーズパラダイムから生じた居住地移動研究は、時間の経過とともにモビリティに対して影響を及ぼす権力の働きを理解しようとしている。縦断的で、民族誌的で、語りによる、伝記的な手法、そしてライフコースの枠組みが、居住地移動研究に適用されるようになっており、モビリティに影響を与える複雑な要因を検討する手法であることが証明されてきた。これらの手法は、モビリティに作用する影響を検討するためだけでなく、居住者の人生を通じてホームを動かすことに関連する課題、強み、そして経験を探るためにも、さらに活用することができる。いつ、どこで、そしてなぜ、モビリティとイモビリティが望ましい実践となるのかについての長期間続いてきた緊張関係と曖昧さと不確かさを地

理学者が解決するにあたり、新しいモビリティーズ研究に端を発するホームと場所の新たな概念化に関与することが助けになるかもしれない。場所とモビリティのより幅広い議論にとっては、現在のホーム概念を前進させることが重要であり、居住地移動の研究者はまさに、この議論を進展させる立場にいるのである。

ACKNOWLEDGEMENTS 謝辞

本研究は、オーストラリア政府リサーチトレーニングプログラム (RTP) による支援を受けた。また、Danielle Drozdewski 博士による極めて重要なフィードバックにも深謝したい。

REFERENCES 文献

- Adey, P. 2006. If mobility is everything then it is nothing: Towards a relational politics of (im)mobilities. *Mobilities*, 1, 75-94.
- Ahmed, S., Castaneda, C., Fortier, A.M., & Sheller, M. 2003. *Up-rootings/regroundings: Questions of home and migration*. New York: Berg Publishers.
- Altman, I., & Low, S. M. 1992. *Place attachment*. New York: Springer.
- Bailey, A. J. 2009. Population geography: Lifecourse matters. *Progress in Human Geography*, 33, 407-418.
- Banner, S. 2005. Why terra nullius? Anthropology and property law in early Australia. *Law and History Review*, 23, 95-131.
- Behr, M., & Gober, P. 1982. When a residence is not a house: Examining residence-based migration definitions. *Professional Geographer*, 34, 178-184.
- Behrendt, L. 1999. White picket fences: Recognizing aboriginal property rights in Australia's psychological terra nullius. *Constitutional Forum*, 10, 50-58.
- Bell, M., & Ward, G. 2000. Comparing temporary mobility with permanent migration. *Tourism Geographies*, 2, 87-107.
- Blunt, A. 2005. Cultural geography: Cultural geographies of home. *Progress in Human Geography*, 29, 505-515.
- Blunt, A., & Dowling, R. 2006. *Home*. London: Routledge.
- Brednikova, O., & Tkach, O. 2010. What home means to the nomad: Summary. *Laboratorium*, 3, 72-95.
- Burke, T., Stone, W., & Ralston, L. 2014. Generational change in home purchase opportunity in Australia. *AHURI Final Report No. 232*, Melbourne: Australian Housing and Urban Research Institute.
- Cairns, D. 2008. Moving in transition: Northern Ireland youth and geographical mobility. *Young*, 16, 227-249.
- Clark, A. 2009. Moving through deprived neighbourhoods. *Population, Space and Place*, 15, 523-533.
- Clark, W. A. V., & Dieleman, F. 1996. *Households and Housing: Choice and outcomes in the housing market*. New Jersey: Center for Urban Policy Research.
- Clark, W. A. V., & Huang, Y. 2003. The life course and residential mobility in British housing markets. *Environment and Planning A*, 35, 323-339.
- Clark, W. A. V., & Onaka, J. L. 1983. Life cycle and housing adjustment as explanations of residential mobility. *Urban Studies*, 20, 47-57.
- Clark, W. A. V., van Ham, M., & Coulter, R. (2014). Spatial mobility and social outcomes. *Journal of Housing and the Built Environment*, 29, 699-727.
- Coulter, R., & Scott, J. 2015. What motivates residential mobility? Re-examining self-reported reasons for desiring and making residential moves. *Population, Space and Place*, 21, 354-371.
- Coulter, R., & van Ham, M. 2013. Following people through time: An analysis of individual residential mobility biographies. *Housing Studies*, 28, 1037-1055.
- Coulter, R., van Ham, M., & Findlay, A. M. 2016. Re-thinking residential mobility. *Progress in Human Geography*, 40, 352-374.
- Cresswell, T. 1999. Embodiment, power and the politics of mobility: The case of female tramps and hobos. *Transactions of the Institute of British Geographers*, 24, 175-192.
- Cresswell, T. 2002. Introduction. In G. Verstraete, & T. Cresswell (Eds.), *Mobilizing place, placing mobility: The politics of representation in a globalized world* (pp. 11-32). Amsterdam: Rodopi.
- Cresswell, T. 2006. *On the move: Mobility in the modern Western world*. New York: Routledge.
- Cresswell, T. 2009. *Place*. In N. Thrift (Ed.), *International encyclopedia of human geography* (pp. 169-177). Oxford: Elsevier.
- Cresswell, T. 2011. Mobilities I: Catching up. *Progress in Human Geography*, 35, 550-558.
- de Certeau, M., Giard, L., & Mayol, P. 1998. *The practice of everyday life: Living and cooking*. (Vol. 2). London: University of Minnesota Press. Tomasik T.J (Trans.)
- de Jong, G. F. 2000. Expectations, gender, and norms in migration decision-making. *Population Studies*, 54, 307-319.
- de Jong, G. F., & Graefe, D. 2008. Family life course transitions and the economic consequences of internal migration. *Population, Space and Place*, 14, 267-282.
- Dieleman, F. 2001. Modelling residential mobility a review of recent trends in research. *Journal of Housing and the Built Environment*, 16, 249-265.
- Easthope, H. 2004. A place called home. *Housing, Theory and Society*, 21, 128-138.
- Elder, G. 1994. Time, human agency and social change: Perspectives on the life-course. *Social Psychology Quarterly*, 57, 4-15.
- Falkingham, J., Sage, J., Stone, J., & Vlachantoni, A. 2016. Residential mobility across the life course: Continuity and change across three cohorts in Britain. *Advances in Life Course Research*, 30, 111-123.
- Feijten, P. 2005. Union dissolution, unemployment and moving out of homeownership. *European Sociological Review*, 21, 59-71.

- Feijten, P., Hooimeijer, P., & Mulder, C. 2008. Residential experience and residential environment choice over the life-course. *Urban Studies*, 45, 141-162.
- Ferreira, F., Gyourko, J., & Tracy, J. 2010. Housing busts and household mobility. *Journal of Urban Economics*, 68, 34-45.
- Findlay, A., & Li, F. 1997. An auto-biographical approach to understanding migration: The case of Hong Kong emigrants. *Area*, 29, 34-44.
- Findlay, A., McCollum, D., Coulter, R., & Gayle, V. 2015. New mobilities across the life course: A framework for analysing demographically linked drivers of migration. *Population, Space and place*, 21, 390-402.
- Findlay, A., & Wahba, J. 2013. Migration and demographic change. *Population, Space and place*, 19, 651-656.
- Fortier, A.-M. 2001. 'Coming home': Queer migrations and multiple evocations of home. *European Journal of Cultural Studies*, 4, 405-424.
- Geist, C., & McManus, P. A. 2008. Geographical mobility of the life course: Motivations and implications. *Population, Space and place*, 14, 283-303.
- Gillespie, B. J. 2017. Household mobility in America: overview and conclusion. In B. J. Gillespie (Ed.), *Household mobility in America: patterns, processes and outcomes* (pp. 241-256). New York: Palgrave Macmillan.
- Gorman-Murray, A. 2007. Rethinking queer migration through the body. *Social and Cultural Geography*, 8, 105-121.
- Gustafson, P. 2001. Roots and routes: Exploring the relationship between attachment and mobility. *Environment and Behaviour*, 33, 667-686.
- Gutting, D. 1996. Narrative identity and residential history. *Area*, 28, 482-490.
- Halfacree, K. H., & Boyle, P. J. 1993. The challenge facing migration research: The case for a biographical approach. *Progress in Human Geography*, 17, 333-348.
- Hannam, K., Sheller, M., & Urry, J. 2006. Editorial: Mobilities, immobilities and moorings. *Mobilities*, 1, 1-22.
- Heidegger, M. 1996. *Being and time: A translation of Sein und Zeit*. Albany: State University of New York Press. ハイデッガー, M. 著, 細谷貞雄訳. 1994. 『存在と時間<上><下>』ちくま学芸文庫.
- Holdsworth, C. 2013. *Family and intimate mobilities*. Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Holloway, S. 2003. Outsiders in rural society? Constructions of rurality and nature-society relations in the racialisation of English Gypsy-Travellers, 1869-1934. *Environment and Planning D*, 21, 695-715.
- Holloway, S. 2005. Articulating otherness? White rural residents talk about gypsy-travellers. *Transactions of the Institute of British Geographers*, 30, 351-367.
- Imbroscio, D. 2012. Beyond mobility: The limits of liberal urban policy. *Journal of Urban Affairs*, 34, 1-20.
- Jones, G. 2000. Experimenting with households and inventing 'home'. *International Social Science Journal*, 52, 183-194.
- Kabachnik, P. 2010. England or Uruguay? The persistence of place and the myth of the placeless Gypsy. *Area*, 42, 198-207.
- Kabachnik, P. 2012. Nomads and mobile places: Disentangling place, space and mobility. *Identities*, 19, 210-228.
- Kabachnik, P., & Ryder, A. 2013. Nomadism and the 2003 Anti Social Behaviour Act: Constraining Gypsy and traveller mobilities in Britain. *Romani Studies*, 23, 83-106.
- King, R., & Skeldon, R. 2010. 'Mind the gap!' Integrating approaches to internal and international migration. *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 36, 1619-1646.
- Kley, S. 2011. Explaining the stages of migration within a life-course framework. *European Sociological Review*, 27, 469-486.
- Kloep, M., Hendry, L. B., Glendinning, A., Jan-Erik, I., & Geir, A. E. 2003. Peripheral visions? A cross-cultural study of rural youths' views on migration. *Children's Geographies*, 1, 91-109.
- Knies, G. 2013. Neighbourhood social ties: How much do residential, physical and virtual mobility matter? *The British Journal of Sociology*, 64, 425-452.
- Kull, M., Coley, R., & Lynch, A. 2016. The roles of instability and housing in low-income families' residential mobility. *Journal of Family and Economic Issues*, 37, 422-434.
- Kulu, H. 2008. Fertility and spatial mobility in the life course: Evidence from Austria. *Environment and Planning A*, 40, 632-652.
- Kulu, H., & Milewski, N. 2007. Family change and migration in the life course: An introduction. *Demographic Research*, 17, 567-590.
- Lund, B. 2013. A 'property-owning democracy' or 'generation rent'? *The Political Quarterly*, 84, 53-60.
- Mason, J. 2004. Personal narratives, relational selves: Residential histories in the living and telling. *Sociological Review*, 52(2), 162-179.
- Massey, D. B. 1994. *Space, place and gender*. Cambridge: Polity Press.
- McHugh, K. E. 2000. Inside, outside, upside down, backward, forward, round and round: A case for ethnographic studies in migration. *Progress in Human Geography*, 24, 71-89.
- McHugh, K. E., Hogan, T. D., & Happel, S. K. 1995. Multiple residence and cyclical migration: A life course perspective. *Professional Geographer*, 47, 251-267.
- McHugh, K. E., & Mings, R. C. 1991. On the road again: Seasonal migration to a sunbelt metropolis. *Urban Geography*, 12, 1-18.
- McHugh, K. E., & Mings, R. C. 1996. The circle of migration: Attachment to place in aging. *Annals of the Association of American Geographers*, 86, 530-550.
- Michielin, F., & Mulder, C. 2008. Family events and the residential mobility of couples. *Environment and Planning A*, 40, 2770-2790.
- Mulder, C., & Hooimeijer, P. 1999. Residential Relocations in the Life Course. In L. van Wissen, & P. Dykstra (Eds.), *Population issues: An interdisciplinary focus* (pp. 159-186). New York: Kluwer Academic/Plenum Publishers.

- Nowok, B., van Ham, M., Findlay, A., & Gayle, V. 2013. Does migration make you happy? A longitudinal study of internal migration and subjective well-being. *Environment and Planning A*, 45, 986-1002.
- Porter, L., & Vogel, M. 2014. Residential mobility and delinquency revisited: Causation or selection? *Journal of Quantitative Criminology*, 30, 187-214.
- Pred, A. 1984. as historically contingent process: Structuration and the time-geography of becoming places. *Annals of the Association of American Geographers*, 74, 279-297.
- Prout, S. 2008. *On the move? Indigenous temporary mobility practices in Australia*. Australian National University, Canberra: Centre for Aboriginal Economic Policy Research.
- Prout, S. 2009. Security and belonging: Reconceptualising aboriginal spatial mobilities in Yamatji Country, Western Australia. *Mobilities*, 4, 177-202.
- Ralph, D., & Staeheli, L. A. 2011. Home and migration: Mobilities, belongings and identities. *Geography Compass*, 5, 517-530.
- Ravenstein, E. G. 1885. The laws of migration. *Journal of the Statistical Society of London*, 48, 167-235.
- Ravenstein, E. G. 1889. The laws of migration. *Journal of the Royal Statistical Society*, 52, 241-305.
- Ralph, E. C. 1976. *Place and placelessness*. London: Pion. レルフ, E. C. 著, 高野岳彦, 阿部 隆, 石山美也子訳 1999. 『場所の現象学——没場所性を越えて』ちくま学芸文庫.
- Ronald, R. 2008. *The ideology of home ownership: Homeowner societies and the role of housing*. New York: Palgrave Macmillan.
- Rossi, P. H. 1955. *Why families move (2nd ed.)*. London: Sage.
- Sharkey, P. 2012. Residential mobility and the reproduction of unequal neighborhoods. *Cityscape*, 14(3), 9-31.
- Sheller, M., & Urry, J. 2006. The new mobilities paradigm. *Environment and Planning A*, 38, 207-226.
- Silvey, R., & Lawson, V. 1999. Placing the migrant. *Annals of the Association of American Geographers*, 89, 121-132.
- Skeldon, R. 1995. The challenge facing migration research: A case for greater awareness. *Progress in Human Geography*, 19, 91-96.
- Skeldon, R. 2012. Migration transitions revisited: Their continued relevance for the development of migration theory. *Population, Space and Place*, 18, 154-166.
- Stabler, M., Gurka, K., & Lander, L. 2015. Association between childhood residential mobility and non-medical use of prescription drugs among American youth. *Maternal and Child Health Journal*, 19, 2646-2653.
- Stockdale, A. 2006. The role of a 'retirement transition' in the repopulation of rural areas. *Population, Space and Place*, 12, 1-13.
- Stockdale, A. 2014. Unravelling the migration decision-making process: English early retirees moving to rural mid-Wales. *Journal of Rural Studies*, 34, 161-171.
- Taylor, J., & Bell, M. 1996. Population mobility and indigenous peoples: The view from Australia. *International Journal of Population Geography*, 2, 153-169.
- Urry, J. 2000. *Sociology beyond societies: Mobilities for the twenty-first century*. London: Routledge. アーリ, J. 著, 吉原直樹監訳 2015. 『社会を超える社会学(改裝版)——移動・環境・シチズンシップ』法政大学出版局.
- Winstanley, A., Thorns, D. C., & Perkins, H. C. 2002. Moving house, creating home: Exploring residential mobility. *Housing Studies*, 17, 813-832.
- Wolf, D. A., & Longino, C. F. 2005. Our "increasingly mobile society?" The curious persistence of a false belief. *Gerontologist*, 45, 5-11.
- Wolpert, J. 1966. Migration as an adjustment to environmental stress. *Journal of Social Issues*, 22, 92-102.
- Young, I. M. 2005. *House and home: Feminist variations on a theme. On female body experience "throwing like a girl" and other essays*. Oxford: Oxford University Press.
- Zelinsky, W. 1971. The hypothesis of the mobility transition. *Geographical Review*, 61, 219-249.

AUTHOR BIOGRAPHY 著者略歴

Caitlin Buckleはオーストラリアニューサウスウェールズ大学の地理学博士課程生である。彼女の研究ではオーストラリア人による「シー・チェンジ (seachange)」と呼ばれる海岸部への移住に注目し、ライフコースを通じた居住地移動を検討するために、居住の記録を取り入れている。彼女の研究関心はモビリティ研究と、特に国内の移住者たちによる場所愛着 (attachment) とホームの経験に置かれている。

付記

本稿は著者であるCaitlin Buckleがニューサウスウェールズ大学の人文・言語学分野の博士課程在学時に執筆されたものである。同校の都市未来研究センター (City Futures Research Centre) の研究員を務めながら2020年に博士号を取得し、現在はシドニー大学の建築学部で研究員を務めている。オーストラリアで「シー・チェンジ (sea-change)」や「ツリー・チェンジ (tree-change)」などと呼ばれる、主にベビーブーム世代を中心に、都市からアクセスできるが農村的であり、アメニティの充実している海岸部や農村部に移住する行動を研究してきた (Buckle 2021)。研究関心はこのような農村的な生活における移住者の経験と地理学、特に「ホーム」とモビリティの感覚に置かれ、デジタル技術を用いた創造的な質的調査法も模索している。博士論文をはじめ、学会での発表等が高く評価されており、ニューサウスウェールズ大学やオーストラリア地理学会からも表彰を受けている。

本稿は「新しいモビリティーズパラダイム」や「移動論的転回」の影響下における「モビリティ」、「場所」、そして「ホーム」といった概念を問い直し、既存研究のレビューを中心としてこれらの再概念化を居住地移動研究の中に位置づけようとする論文である。居住地移動は長きにわたり地理学において中

心的な関心を集めてきたが、日本国内の研究において移動論的転回の議論と交差する機会は少なく、「場所」や「ホーム」の概念と移動を関連づけて論じる動きも限られてきた。しかし、人・モノ・情報の流動化が進む中、近年日本国内でも「アドレスホッパー」と呼ばれる、住居を所有・賃借せずに宿泊施設などを転々としながら生活する人々や、「多拠点居住」のように複数の生活拠点を持って生活する暮らし方が注目を集めている。人がどこに住まうのか、という問いに改めて向き合うためには、これらの概念を避けて通ることはできないと言える。

訳者注

- 1) 原文で参考文献として引用されていた研究の著者でもあるRossiの著作を翻訳した久慈(2010)においてlongitudinalが「縦断的」と訳出されていたことを参考に、本稿では一貫して「縦断的」と訳した。縦断的手法とは、期間の長さを問わず、特定のデータや対象について一定の時間的スパンにわたって調査することを指す。
- 2) ヨーロッパを中心に世界に広く分布する少数民族で、歴史的に長い間定住せず移動生活を送ってきた人々、かつてはジプシーなどと呼ばれていたが、軽蔑的であるとして近年では自称でもあるロマが広く用いられている。9～10世紀ごろにインド北西部から各地へ広がったと考えられており、現在でも移動生活を続ける場合と、定住化している場合など多様化している。
- 3) 引用した訳文ではhomeに「住まい」という訳語が当てられていたが、本稿ではhomeについてすべて「ホーム」と訳出している。
- 4) 主に高所得で比較的初期の高齢者が退職後に行うことの多いとされる、よりよい生活環境(＝アメニティ、温暖な気候や豊かな自然環境など)や社会的なネットワーク(友人など)を目的とした移住(Stockdale 2006; Litwak and Longino 1987)。
- 5) 1970年代に観測された、都市から農村などの非都市的地域への人口移動が起こるという「反都市化」(counter-urbanisation)の一部である、都市部から他地域への移住、アメニティ移住もこれに含まれるが、反都市化ではアメニティ移住と異なり移住者の年代や所得といった属性が多様であることが特徴である(Stockdale 2014)。

訳者参考文献

- 久慈利武 2010. ピーター・ロッシによる応用社会学緒論. 東北学院大学教養学部論集155: 127-153
- Buckle, C. 2021. Migrants' encounters of a lifestyle destination: From coastal idyll to activated city. *Geographical Research*. 59:255-267.
- Litwak, E. and Longino, C. F. 1987. Migration patterns among the

elderly: A developmental perspective. *The Gerontologist* 27: 266-272

Stockdale, A. 2006. The role of a 'retirement transition' in the repopulation of rural areas. *Population, Space and Place*. 12: 1-13

訳者謝辞

本論文の翻訳に当たっては、東京大学大学院総合文化研究科人文地理学教室において、先生方、院生諸氏から貴重なご意見を頂きました。末筆ではございますが、投稿に向けてご協力いただきましたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

また、本論文の翻訳権は2021年12月8日にCopyright Clearance Centerを介して取得しており、取得に当たっては、JST次世代研究者挑戦的研究プログラム(グラント番号:JPM-JSP2108)による支援を受けています。